慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	移行期のパン・アフリカニズム運動について：一九三〇年代から一九四〇年代前半の時期を中心として
Sub Title	The Pan-African movement in transitional stages : 1930s 1st half of 1940s
Author	小田, 英郎(Oda, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1973
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.46, No.4 (1973. 4) ,p.40- 65
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19730415-0040

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

移行期のパン・アフリカニズム運動について

――一九三〇年代から一九四〇年代前半の時期を中心として――

小田英郎

はしがき
一、パン・アフリカニズム史における一九三〇年代および一九四〇年代前半の意味
二、パン・アフリカニズムへの二つの経路
三、一九三〇年代前半におけるアフリカ・ナショナリズムの動向とパン・アフリカニズム的志向性
四、イタリアのエチオピア侵略とアビシニア国際アフリカ人友好協会の設立
五、国際アフリカ人サーヴィス・ビューローの設立――パン・アフリカニズム的主体性の萌芽――
六、第二次世界大戦の勃発と一九四〇年代初期の動向
七、パン・アフリカ連盟の創設――マンチェスター会議への道――

はしがき

本稿は、一九三〇年代から一九四〇年代前半にかけての時期におけるパン・アフリカニズム運動の史的展開過程を考察しようとするものである。筆者はこれまでにパン・アフリカニズムに関する数篇の論説を『法学研究』に発表し、そのなかで一九〇〇年から一九二〇年代末期にいたる時期の同運動史を、利用可能なあらゆる資料・文献を用いて再構成してきた。(1) 本

稿はそれらの論説の続篇にあたるものであるが、しかし同時にまた、独立した論説でもある。なぜなら、本稿であつかう一九三〇年代から一九四〇年代前半の時期は、パン・アフリカニズム史のなかで一つのまとまりをもつた時期であつて、けつして便宜的な年代的区分ではないからである。すなわち、この時期は一般的にはデュボイの運動もガーヴィーの運動も事実上消滅したのちの「空白の時代」とされているのであり、そうしたネガティヴな意味で、一つのまとまりをもつていた時期だつたのである。

しかし筆者は、この時期を必ずしもネガティヴな意味をもつものとして見てはいない。いやむしろ逆に、一九三〇年代から一九四〇年代前半の時期は前期パン・アフリカニズムから後期パン・アフリカニズムへの移行期であり、「パン・アフリカニズムのアフリカナイゼーションの準備期」として「意味のある時代」であつたという積極的な評価をあたえるものである。

(1) 筆者がこれまで『法学研究』に発表したパン・アフリカニズムに関する論説はつぎの通りである。
「現代アフリカとパン・アフリカニズム」・法学研究・三七巻四号・昭和三十九年四月
「マーカス・ガーヴィーとパン・アフリカニズム」・法学研究・四二巻六号・昭和四十四年六月
「W・E・B・デュボイとパン・アフリカニズム」・法学研究・四三巻一〇号・昭和四十五年十月
「前期パン・アフリカニズムの盛衰とアフリカ・ナショナリズム」・法学研究・四四巻三号・昭和四十六年三月

一、パン・アフリカニズム史における一九三〇年代および一九四〇年代前半の意味

すでによく知られているように、デュボイを中心的指導者とするパン・アフリカニズム運動の主流は、一九二九年のパン・アフリカ会議（チュニス）が流産に終つたあと、急激な下降線をたどつていつた。あるいは、急激な下降線をたどつたというよりもむしろ、表面的には仮死状態に入つた、というべきであろうか。事実、デュボイ自身は、「パン・アフリカの理

念は二〇年後の第二次大戦さなかまで明らかに死んだままの状態におかれた」という至極く簡単な断定の仕方で、一九三〇年代および一九四〇年代初期がパン・アフリカニズム運動史のなかの「空白の時代」であつたことを語つている。たしかに、デュボイの主要な著作を見ても、流産に終つたチュニスのパン・アフリカ会議（一九二九年）から一九四五年十月の「第五回」パン・アフリカ会議（英国・マンチェスター）にいたる時期のパン・アフリカニズム運動についてはまつたくといつていいほど触れていないし、他の著述家（たとえばローガン、リーガム等）の手になる通史的文献にも、この時期のパン・アフリカニズム運動に関する叙述は、ほとんど見いだせない。[1] パン・アフリカニズム運動史についてもつとも詳細に論述したパドモアの『パン・アフリカニズムかコミュニズムか？』（一九五六年）ですら、この時期については、わずか八ページを割いているにすぎないのを見ても、一九二九年から一九四五年にいたる時期がいかに軽視されているかがわかるのである。[2]

たしかに、運動量とか運動の展開とかいつた側面を見れば、右の時期はパン・アフリカニズム史における空白の時代かもしれない。しかし、そもそも歴史に空白は存在しないはずである。そしてパン・アフリカニズム史もまたその例外ではない。すなわち、運動量の側面において空白のように見える一九三〇年代から一九四〇年代前半にかけての時期も、その質的な側面に照明をあてれば、けつして軽視しえないような、「意味のある時代」であつたように思われる。

いつたいどのような点で「意味のある時代」であつたのか。この時期は、デュボイを中心的指導者とし合衆国のアフリカ系知識人を主たる担い手とする前期パン・アフリカニズムから、アフリカ・ナショナリストを担い手とし一九四五年十月の「第五回」パン・アフリカ会議を始発点として形成された後期パン・アフリカニズムへの橋渡しの時期あるいは移行期であつたという点で、「意味のある時代」だつたのである。いいかえれば、この時期は、一方ではデュボイ流のパン・アフリカニズム運動が合衆国においてすらその基盤を著しく弱化させ、その運動量をほとんどゼロに近いところまで縮少させたのに対して、他方では、たとえばロンドンにあつた西アフリカ学生同盟（West African Students' Union）などのアフリカ人組織

がパン・アフリカニズム的志向を育て、またI・T・A・ウォレス＝ジョンソン（シエラレオン）、J・ケニヤッタ（ケニア）、K・エンクルマ（ゴールド・コースト）G・パドモア（トリニダッド）等の知識人がアビシニア国際アフリカ人友好協会（International African Friends of Abyssinia, 1935）、国際アフリカ人サーヴィス・ビューロー（International African Service Bureau, 1937）、パン・アフリカ連盟（Pan-African Federation, 1944）等の組織を通じて徐々にパン・アフリカニズムに目覚めていき、一九四五年十月の「第五回」パン・アフリカ会議をアフリカ・ナショナリストの手に引きつぐための準備を、緩慢ながら進めていた時期なのであつた。

第二次世界大戦後のパン・アフリカニズムは、それが積極化され、政治化され、民族主義化された点に、また訴願から主張へと転換した点に目だつた特徴をもつているとすれば、そしてこうした質的変化が一口にパン・アフリカニズムのアフリカナイゼーションとして把握されるとすれば、そうしたアフリカナイゼーションの準備期としての一九三〇年代および一九四〇年代前半は、たとえその運動量は微少であつても、現代的視座からしてこれを無視することはできないのである。

もちろん、前述のようにアフリカ知識人が徐々にパン・アフリカニズムに目覚めていつたとはいえ、かれらの目覚め方はさほどはつきりとした形のものではなく、それがいわば「自覚症状」として表出したのは、一九四四年におけるパン・アフリカ連盟の創設前後においてであつたであろう。しかしながら、そこにいたるまでの時期はやはり、たとえこれらアフリカ知識人がみずから意識しなかつたとはいえ、客観的には「パン・アフリカニズムのアフリカナイゼーション」の前史として位置づけられるべきものであると思う。そこで本稿では、こうした意味における前史――「パン・アフリカニズムのアフリカナイゼーション」の前史――としての一九三〇年代および一九四〇年代前半の時期に焦点を合せ、アフリカの知識人が主としてヨーロッパ（とくにイギリス）をその活動の中心的舞台として、徐々にパン・アフリカニズムに目覚めていつた過程を追つてみることにしたい。

(1) デュボイについては、たとえば *Dusk of Dawn: An Essay Toward an Autobiography of a Race Concept*,(1940), New York: Schocken Books, 1968; *The World and Africa: An Inquiry into the part which Africa has played in world history*, (1946), An Enlarged ed., New York: International publishers, 1965; "Africa and American Nergo Intelligentsia," *Présence Africaine*, Decembre, 1955—Janvier, 1956; *The Autobiography of W. E. B. Du Bois: A Soliloquy on Viewing My Life from the Last Decade of Its First Century*, New York: International Publishers, 1968; "The Pan-African Movement," in G. Padmore ed., *Colonial and Coloured Unity, A Programme of Action: History of Pan-African Congress*, London: The Hammersmith Bookshops 1963; "Pan-Africanism: A Mission in My Life," *United Asia*, April 1956; ローガンについては "The Historical Aspects of Pan-Africanism, 1900—1945," in AMSAC, ed., *Pan-Africanism Reconsidered*, Berkeley & Los Angeles: University of California Press, 1962. リーガムについては *Pan-Africanism: A Short Political Guide*, New York, Washington, London,: Praeger, 1962 を、それぞれ挙げることができる。

(2) G. Padmore, *Pan-Africanism or Communism?: The Coming Struggle for Africa*, London: Dennis Dobson, 1956, pp. 144-151.

二、パン・アフリカニズムへの二つの経路

前章に述べたように、一九三〇年代から一九四〇年代前半にかけての時期は、「パン・アフリカニズムのアフリカナイゼーション」の準備期であり、「アフリカなきパン・アフリカニズム」から「アフリカ化されたパン・アフリカニズム」への転換の前史的段階に相当するのであるが、この段階の特徴は、一方では一九二〇年代に昂揚を示した合衆国・西インド諸島のアフリカ系人を中心とするパン・アフリカニズム運動が、主流（デュボイの運動）、傍流（ガーヴィー運動）ともに挫折してしまつていたこと、他方ではそれと対照的に、それまでアフリカ（系）人国際主義にほとんど関心をいだかなかつた（あるいはこれに対してむしろ否定的な態度をさえもちつづけていた）アフリカ知識人が徐々にアフリカ（系）人国際主義への傾斜度を強めていつたこと、に求められる。

こうしたなかでアフリカ知識人が示したアフリカ（系）人国際主義への漸次的傾斜には、おおむね二つの経路があつた。一つはナショナリズム運動の経路であり、他の一つはコミュニズム運動の経路である。

このうち、ナショナリズム運動の経路を通つてアフリカ（系）人国際主義へ傾斜していつたアフリカ知識人としては、エンマルク、ケニヤッタ、マッコネン等があり、コミュニズム運動の経路をたどつて最終的にパン・アフリカニストに変貌した代表的人物としてはウォレス＝ジョンソン、パドモア等が挙げられる。(1)

しかしながら、興味深いことには、この二つの経路を通つたアフリカ知識人の、アフリカ（系）人国際主義への傾斜の過程は、それぞれ異質的な面をもつている。すなわち、ナショナリズム運動の経路を通つたアフリカ知識人は、アフリカ・ナショナリズムを発展させるかたちで、それとパン・アフリカニズムとの融合（換言すればナショナリズムのパン・アフリカニズム化、あるいはパン・アフリカニズムのアフリカナイゼーション）を生みだしたのに対して、コミュニズム運動の経路をたどつたアフリカ知識人は、プロレタリア国際主義とアフリカ（系）人国際主義の矛盾・対立をむしろ顕在化させつつ、転向するかたちでパン・アフリカニストに変身したのである。(2)

ただ、そうだからといつて、後者の場合、コミュニズムとパン・アフリカニズムが相互に排他的であつたというわけではない。排他的であつたのはもつぱらコミュニズムの側であり、パン・アフリカニズムは未成熟のイデオロギー運動に多く見られるごとく、むしろ柔軟性に満ち、他のイデオロギー運動の影響を受けやすい傾向をもつていた（たとえば、アプターとコールマンは、こうしたパン・アフリカニズムのイデオロギー的柔軟性を折衷主義というタームで表現している）。(3) これらのアフリカ（系）コミュニストがパン・アフリカニストに転向しはじめたのは一九三〇年代のなかばころからであるが、これまた興味深いことには、むしろこの前後から、コミュニストの転向とはうらはらに、パン・アフリカニズムはマルクス・レーニン主義の影響を受けはじめたのであつた。アプター、コールマン、トムプソンその他多くの論者は、パン・アフリカニズムがガンディー主義などとともにマルクス・レーニン主義を部分的に受容したことを指摘しているが、(4) それは一つには、ホーリズムとしてのマルクス・レーニン主義がパン・アフリカニズムを拒否したとしても、パン・アフリカニズム運動の側がマルクス・レー

ニン主義を部分的に受けいれるそのチャンネルとしての役割を、前述のような転向者がはたしたことによるであろう。

しかしながら、右のようなパン・アフリカニズムへの二つの経路のうち、どちらの比重がより大きかつたかといえば、むろんそれは圧倒的にナショナリズムの経路であつた。それは結局のところ、両大戦間期にあつてコミュニズムがアフリカ問題あるいは黒人問題に効果的にアプローチしえず、したがつて、もともとアフリカ人あるいはアフリカ系人を活動家として極くわずかしか組織することができなかつたことに起因するであろう。(5) そこで以下、ナショナリズムの経路に力点をおきつつ、パン・アフリカニズムの系譜を追うことにしたい。

(1) ここでパドモアをアフリカ知識人として類別したことについては、あるいは異論があるかもしれない。たしかにかれは、厳密にいえばアフリカ出身ではなく西インド諸島トリニダッドの出身であるから、アフリカ人でなくアフリカ系人というべきであろう。しかしながら、パドモアの政治活動をみれば、かれはトリニダッド人というよりもむしろ、アフリカ人以上にアフリカ人であつたことがわかる。かれは、一九三四年にコミンテルンを離れてパン・アフリカニズム運動に身を投じ、一九五七年以後はガーナにあつてエンクルマの政治顧問をつとめ、一九五九年九月二十三日にガーナ市民として死んだ。エンクルマはパドモアを「ガーナの養子」と呼び「アフリカ解放のかがり火をたかく掲げつづけた」人物としてかれを称讃している。この言葉に象徴されるかれの政治生活に鑑みて、ここではパドモアをアフリカ系人ではなくアフリカ人として類別しておきたい。

(2) この点については、パドモアの著作の表題 *Pan-Africanism or Communism?: The Coming Struggle for Africa* を想起されたい。

(3) D. E. Apter & J. S. Coleman, "Pan-Africanism or Nationalism in Africa," in AMSAC, ed., *op. cit.*, p. 88.

(4) *Ibid.*, p.88 , V. B. Thompson, *Africa and Unity; The Evolution of Pan-Africanism*, London & Harlow : Longmans,1969, p. 33.

(5) この点については、拙稿「コミンテルンの戦略・戦術とサハラ以南のアフリカ・ナショナリズム」・法学研究・四五巻六号（昭和四十七年六月）を参照されたい。

三、一九三〇年代前半におけるアフリカ・ナショナリズムの動向と パン・アフリカニズム的志向性

一般に両大戦間期および第二次大戦中の時期は、いわばアフリカ・ナショナリズムの萌芽期にあたるが、このうち一九三

〇年代から一九四〇年代前半の時期にあつて、もつとも広範な活動範囲ともつとも大きな影響力をもつていたナショナリズム組織は、西アフリカ学生同盟であつた。西アフリカ学生同盟は一九二四年にナイジェリアの留学生ラディポ・ソランケによつてロンドンに創設されたアフリカ知識人のナショナリズム組織であつて、当初はアフリカそのものとは比較的関係が薄かつたが、徐々に英領西アフリカ各地に支部をおくにいたり、一九三〇年には、それまで英領西アフリカ各地に強い影響力をもつていた英領西アフリカ国民会議がその指導者ケイスリー＝ヘイフォードの死によつて事実上消滅するや、同会議の後継組織的役割をも担うようになり、その比重は萌芽期のアフリカ・ナショナリズムのなかでは相対的に大きなものとなつたのである。(1)

しかしながら、西アフリカ学生同盟がこの時期にはたした注目すべき役割は、とりわけそれがもつていた国際性の側面において評価されなければならない。すなわちおなじ時期に存在した他のナショナリズム組織（それはほとんど英領西アフリカ、同東アフリカ、南アフリカ等にかぎられていた）――たとえばナイジェリア国民民主党(Nigerian National Democratic Party,1923)、ナイジェリア青年運動（Nigerian Youth Movement, 1930)、ゴールド・コースト青年会議（Gold Coast Youth Conference,1930)、ケニアのキクユ連盟（Kikuyu Association, 1920)、南アのアフリカ人国民会議（African National Congress, 1912)など――は、それぞれ地域的な制約が大きく、そのために国際的な視野に欠けるところがあつたのに対して、西アフリカ学生同盟はロンドンに本部をもつアフリカ人留学生の組織であつたために、外部世界のさまざまな思想や運動に接しやすく、したがつて国際的視野にたつてアフリカ・ナショナリズムを発展させることが比較的容易であつた。そして、そのために西アフリカ学生同盟は、とりわけ一九三〇年代以降、多くのアフリカ知識人（あるいはアフリカ・ナショナリスト）をして、アフリカ（系）人国際主義への目を開かせ、やがてかれらを第二次大戦後の指導的パン・アフリカニストへ成長させるという、大きな役割をはたしえたのである。

もつとも、厳密にいえば、西アフリカ学生同盟はその初期の段階では政治色をさほど表面にださず、むしろ文化運動に力点をおいていた。このことは、同学生同盟が掲げた組織の目標にも明らかである。こころみにその主要なものを挙げると、

㈠　アフリカの歴史、慣習、制度に関する知識のための機関として、活動すること。

㈡　アフリカとその発展に関するあらゆる問題についての、研究センターとして活動すること。

㈢　自助、連帯、協力、真の指導者精神を、その会員のあいだに増進させること。

㈣　アフリカ的な生活と哲学の真の姿を世界に示し、それによつて文明の進歩に、明確なアフリカ的貢献をなすこと。

㈤　全アフリカの民衆のあいだに、民族意識と人種的誇りの精神を涵養すること。(2)

このようにその目標が文化的側面に力点をおいていたとはいえ、西アフリカ学生同盟は、「アフリカの個性」を探求し、アフリカ人の民族意識をかきたて、アフリカの主体性を涵養するうえで、大きな実績をのこしたのである。さらにわれわれは、前掲の諸目標から、西アフリカ学生同盟が単に西アフリカだけでなく「全アフリカ」をもその視野のなかにおいていたことを知るべきであろう。第二次大戦後にアフリカに導入されたパン・アフリカニズムが「アフリカの一体性」を前面に押しだしたのは、まさしくこうした全アフリカ的な視野にたちえたからであるが、それがすでに両大戦間期に、一部のアフリカ人によつてではあれ共有されはじめたのは、一つには前述の目標を掲げた西アフリカ学生同盟の活動があつたからにほかならないであろう。

西アフリカ学生同盟はまた、その名称がいだかせるイメージとはちがつて、知識人だけにその基盤を限定してはいなかつた。一九二九年から一九三二年にかけてソランケはナイジェリアおよびその他の英領西アフリカで組織活動をおこなつたが、そのときの組織化の対象には、現地の知識人ばかりでなく、伝統的支配者層も含まれていた。そしてその結果、たとえばゴールド・コーストのアフォリ＝アッタ、アデモラ二世といつた大族長ばかりでなく、もつとも保守的なカノ（ナイジュ

リア北部）の回教主さえもが、それぞれの地域につくられた西アフリカ学生同盟の支部の後援者になつたのであつた。[3] むろん、こうした伝統的支配者層への積極的アプローチは、コールマンの指摘するように、一面ではあたかも西アフリカ学生同盟がイギリスの間接統治政策に反撥していないかのように装う手段としても効果的だつたのであり、そのために西アフリカでのソランケの組織活動は、沿岸地方だけでなく内陸部にまでおよぶことができたのであろう。[4]

このように西アフリカ学生同盟は、その中核を在ロンドンのアフリカ知識人で固め、さらに周辺には現地のアフリカ知識人と伝統的支配者層の一部を配置することに成功したが、このほかにもヨーロッパや合衆国に留学しているアフリカ人がロンドンにたち寄つたさいにこれとの接触を深めるといつたかたちで、西アフリカ学生同盟の影響力が徐々に欧米世界にも拡大していつたことにも留意する必要がある。[5]

前述のように西アフリカ学生同盟は、組織活動の面ではアフリカの伝統的支配者層を部分的に包摂するほどの柔軟性をもち、またそれ以外の運動面でも、イギリス本国ならびに植民地政府当局の警戒心を薄れさせるような、比較的穏健な姿勢をとりつくろつてはいたが、その指導層は、文化活動の仮面のしたに、反帝・反植民地主義的な政治認識をかくし、民族主義的な熱情をたぎらせていた。

たとえばソランケは一九二七年に書かれた未公刊の著作 "United West Africa (or Africa) at the Bar of the Family of Nations" のなかで、「古代、中世の黒人国においては……西アフリカはみずからの創造になる組織化された政府をもつていたが、その水準は……当時知られていた世界のいかなる政府にも……匹敵するものであつた。……この時期のヨーロッパにはまだ、民族国家もなければ憲法もなく、また議会もなかつたのである」という表現でアフリカの歴史を讃美し、奴隷貿易とそれにつづく植民地化が、アフリカの犠牲においてヨーロッパ・アメリカを発展させた過程を論じたのち、西アフリカを回復し再生させるためには、「あらゆる外来の名称はなるべく使わないようにさせ、最終的にはそれらを廃絶しなけれ

ばならない。……イギリス帝国主義とアフリカ・ナショナリズムは、その希求においても理論においても、また実践においても、二つの相対立する存在なのだ」と断じている。[6] さらにソランケは、おそかれ早かれ知識人層と伝統的指導者層が統一して白人に対し天罰をくわえるであろうと述べたのち、植民地主義者の唱える漸進的改良主義を攻撃して、「白人種が現在の発展段階に到達するのに、千年を要した。他方モンゴル人種である日本人は、それに追いつくのに五〇年を要したにすぎない。……われわれ西アフリカ人がアーリア人種やモンゴル人種に二五年間で追いつけないわけはない」と主張しているのである。[7]

右の主張をみると、この時期のアフリカ知識人に共通の、人種的な観点、人種的な認識が、ソランケにも大きな影響をあたえていることがわかるが（そしてこれはガーヴィー主義の影響でもあろうが）、そうした人種的観点への傾斜とからみつつも、ソランケおよび西アフリカ学生同盟の運動が文化的ナショナリズムから政治的ナショナリズムへと転換するその下地が、一九二〇年代の末期から一九三〇年代初期にかけて徐々に形成されつつあつたのを、うかがい知ることができる。コールマンが、このソランケの未公刊の著作を、おなじ西アフリカ学生同盟の指導者であつたゴールド・コースト出身のド・グラフト＝ジョンソンの著作 *Toward Nationhood in West Africa* (1928) と並んで、一九世紀末期のブライデンの著作以来出現した、最初の（アフリカ）民族主義的著作であると称讃したのは、けつして過大評価ではないと思う。[8]

しかしながら、こうした指導層の意識にもかかわらず、西アフリカ学生同盟は全体としては比較的穏健な姿勢を保ちつつ一九三〇年代のなかばを迎えた。そして、こうした傾向は、一九三五年十月に本格化したイタリアのエチオピア侵略によつて、はじめて変化をみせるのである。

（1）西アフリカ学生同盟が、一九三〇年以降英領西アフリカ国民会議の後継的組織としての役割をもあわせて担うようになつたという点については、Thompson, *op. cit.*, p. 31 を参照されたい。

（2）*Ibid.*, p. 30.

(3) J. S. Coleman, *Nigeria: Background to Nationalism*, Berkeley & Los Angeles: University of California Press, 1960, pp. 206-7.
(4) *Ibid.*, p. 207.
(5) この点については、たとえば Thompson, *op. cit.*, p. 31 を参照されたい。
(6) Coleman, *Nigeria*, pp. 205-6.
(7) *Ibid.*, p. 206,
(8) *Ibid.*, p. 205.

四、イタリアのエチオピア侵略とアビシニア国際アフリカ人友好協会の設立

ファシスト・イタリアのエチオピア侵略は、それまで遅々として発展を示さなかつた萌芽期のアフリカ・ナショナリズムに対して、大きな衝撃をあたえた事件であつた。それがアフリカのナショナリストにとってとりわけ衝撃的であつたのは、侵略されたエチオピアが、植民地時代のアフリカ全体にとって、自分たちが将来かちとるべき独立と自由のシンボルとして機能してきた、黒人国家だつたからである。エチオピアが早くから「独立アフリカ」ないしは「アフリカの主体性」のシンボルとみなされていたことは、一九一〇年代から一九二〇年代における英領西アフリカの指導的ナショナリスト、ケイスリー＝ヘイフォードの代表的著作が、*Ethiopia Unbound: Studies in Race Emancipation* という表題を掲げていたことや、さらに今世紀初頭のニヤサランドにもりあがつたチレムブウェの宗教的反ヨーロッパ運動が、本来エチオピアそのものとは無関係であつたにもかかわらず、エチオピアニズムと称していたこと、などに典型的に現われている。(1)

このように、独立アフリカのシンボルであつたエチオピアが侵略されたことにくわえて、イギリス、フランスといつた二大アフリカ植民地保有国が対イタリア宥和政策をとつたことは、アフリカ・ナショナリストの反ヨーロッパ的感情をいつそ

う強く刺激するところとなつた。[2] コールマンの表現をかりれば、こうした宥和政策の採用は、「白人は本能的に、また利害の点からも、黒人に相対するときは団結するものなのだという（アフリカ人の）確信を強めるのに役だつた」のであつた。[3]

こうしたなかで、一九三五年末、ロンドンにアビシニア国際アフリカ人友好協会が設立された。このアビシニア国際アフリカ人友好協会の主たる目的は、パドモアによれば、「ファシズムの侵略の犠牲者に対するイギリス国民の同情と支持とを生みだし、アビシニアの領土保全と政治的独立の維持を力のかぎり、あらゆる手段をもちいて支援すること」であつた。[4]

同協会はその構成面ではまつたくパン・ネグロ的であつて、会長にはトリニダッド出身のC・L・R・ジェイムス、副会長に英領ガイアナ出身のP・ミリアードと（おなじ英領西インド諸島グレナダ出身の）T・A・マリショウが就任し、その他ケニア出身のケニヤッタ、ジャマイカ出身のエイミー・A・ガーヴィー（マーカス・ガーヴィー夫人）、トリニダッド出身のパドモアとS・マニング、ソマリランド出身のモハメッド・サイドが執行委員会を構成した。このほかに英領西アフリカのアフリカ人組織である原住民権利擁護協会（Aborigines' Rights Protection Society）の訪英団代表G・E・ムーア、S・R・ウッドおよびJ・B・ダンクワーなどが、アビシニア国際アフリカ人友好協会の後援者として活動したことも、同協会と、この時期のアフリカにおけるナショナリズム運動との直接的なむすびつきを物語る事実として、注目さるべきであろう。[5]

他方、西アフリカ学生同盟は、アビシニア国際アフリカ人友好協会の中枢にこそ参画しなかつたが、その底辺をささえる役割をはたし、またこれとは別に独自のエチオピア防衛委員会（Ethiopian Defence Committee）を組織して、イタリアの侵略に対する抗議運動を展開した。

こうしたエチオピア支援運動は、所期の目的との関係でいえば、まつたくといつていいほど効果を挙げることができなかつた。すなわち、前述のようにイギリス、フランスは対イタリア宥和政策に傾き、ために国際連盟による対イタリア経済封鎖は実効性がいちじるしく薄いものとなり、一九三六年五月にはアジス・アベバは陥落し、つづいてイタリアによるエチオ

ピア併合が宣言されるにいたつたのである。

しかしながら、パン・アフリカニズム史の観点からしてこの対エチオピア支援運動がたかく評価さるべきなのは、これがその副産物として、一種のアフリカ人国際主義の自覚を多くのアフリカ・ナショナリストの胸中に生みだしたことによる。こうしたアフリカ人国際主義的志向は、すでに西アフリカ学生同盟によつて涵養され、アフリカ・ナショナリズム全般に対して（地域的な偏差こそあれ）徐々に影響をおよぼしつつあつたが、アフリカ・ナショナリズムのシンボルであるエチオピアへの支援運動は、そうしたアフリカ人国際主義的志向に具体性をあたえる役割をはたしたのであつた。

もう一つ注目すべきことは、パドモアに代表されるアフリカ系コミュニストが、この時期にいたつてアフリカ人国際主義へ転向しはじめたことである。パドモアはトリニダッド出身のアフリカ系人であつて、合衆国留学中に共産党に入党し、さらに一九三〇年代初期にモスクワに渡つて教育を受け、その後赤色労働組合インターナショナル（プロフィンテルン）の黒人問題局議長として、ヨーロッパ各都市を舞台に活動していた人物であつた。かれはそのイデオロギー的立場から、パン・アフリカニズムの主流であるデュボイの運動、および傍流であるガーヴィーの運動をプチブル的であるとして批判しつづけてきたが、一九三〇年代のなかごろから、逆にこれへの傾斜を徐々に示しはじめた。こうした変化は、反面ではコミンテルンに対する離反という形をとつてあらわれるのであるが、その原因は一九三〇年代におけるソ連およびコミンテルンの帝国主義に対する政策が、アジア、アフリカのナショナリズムに対する裏切り行為としてパドモアの目に映じたところにあつた。

すなわち、一九三〇年代前半期のコミンテルンは、二〇年代初期にはじまる統一戦線戦術の時期から、三四～五年にはじまる反ファシズム人民戦線戦術の時期への転換期にあり、従来の「下からの統一戦線」が「上からの統一戦線」へ、そしてさらに「すべてのブルジョア政党ががただちにファシストなのではない」という前提にたつての「より広範な勢力との協調」へと、短期間にその戦術を変化させていつたのであるが、（これと並行してソ連の外交政策も、一九三四年九月の国際連盟加盟、一九

三五年五月の仏ソ相互援助協定調印にみられるごとく、そのイデオロギー的純度を薄めていつたのであるが）、こうした戦術上、外交上の変化は、黒人労働運動を反西欧帝国主義の角度から組織しつつあつたパドモアの立場からすれば、とうてい耐えがたい妥協だつたのであろう。

より直接的な事実関係に即していえば、ナチス政権が成立した一九三三年一月から約半年後の同年八月に、コミンテルンは、黒人労働者国際労働組合会議（International Trades Union Congress of Negro Workers）の解散を決定するが、このことがパドモアのコミンテルンに対する不信感を決定的にしたのである。かくて、翌一九三四年になると、パドモアはコミンテルンに対する批判を公けにしはじめ、ついに同年六月にはコミンテルンから追放されるにいたるのであるが、[6] この間の事情についてパドモア自身はつぎのように説明している。

「わたしはコミュニスト・インターナショナルのいくつかの上級機関のなかで責任ある地位についていたが、コミュニスト・インターナショナルは、ソヴィエト政府の新しい外交政策を是認することのみか、その加盟組織の反帝国主義的活動にブレーキをかけ、それによつてアジア・アフリカの若い民族解放運動を犠牲にすることをも要求された。このことはわが民族の基本的な利益に対する裏切りであり、わたし自身それに同調することはできないと思つた。だから、自分とコミュニスト・インターナショナルとのむすびつきを切る以外に方法がなかつたのである」[7]

フッカーのいうように、右の主張はたしかにパドモアの真意に近いものであろう。[8] しかし、それとは別の角度からもう少し掘りさげれば、もともとパドモアは心情的にはアフリカ（系）人国際主義者であつて、プロレタリア国際主義者ではなく、それがコミンテルンの活動家になつたのは、コミンテルンが黒人問題を民族問題として位置づけ、黒人を被圧迫民族と規定した（コミンテルン第六回大会）ことから、黒人解放への期待を国際共産主義運動にかけるにいたつたためであろう、と考

えることもできる。いいかえれば、もともとパドモアは、むしろ黒人運動家としての側面をより多くもつていたのではないか、ということである。そうでもなければ、かれがコミンテルンから追放された翌年に起つたイタリアのエチオピア侵略戦争を、かれ自身も「人種戦争」とみた、その人種的視角への転化が、いささか唐突にすぎるであろう。[9] このことは、のちにいたつてパドモアが、自分は一九三〇年代初期に、第一段階を白人帝国主義者に対する人種革命（この段階では共産党は各地の民族ブルジョアジーと合作する）、第二段階を階級革命（第一革命達成の直後に党によつて組織される）とする二重革命を構想していたと語つたことからも、十分推測できるのである。[10]

もし右の推測がただしいとすれば、一九三四～五年におけるコミンテルンの戦術転換とそれにつづくイタリアのエチオピア侵略を契機として、パドモアが国際共産主義と自分の政治的性向とのギャップを強く意識し、アフリカ（系）人国際主義へと転向したことが、よりよく理解できる。

ともかく、その転向の動機については、ある程度推測にたよらざるをえないが、パドモアは一九三四年二月には、かつて自分が批判した当の相手であるデュボイに対して書簡を送り、つぎのように共闘を呼びかけている。

「在仏黒人は『黒人種』誌の編集者である若いスーダン人（ママ）ギャラン・クヤテ氏――その名前は貴方もきつとお聞きおよびでしようが――の指導のもとに最近ある会議を開きました。黒人問題が、最近の経済的、社会的危機との関連において討議され、またわが黒人種の根絶を狙つているファシズムの危険が論じられたしだいです。それは、これまでわたしが黒人たちのなかで聞いた、もつとも真剣な政治的討議でした。同会議は、黒人の世界的統一を達成すべき共同の行動綱領をうちだす目的をもつて、黒人世界統一会議を率先招集することを決定しました。ヨーロッパの黒人学生は行動を要求しております。わたしはまた、最近ロンドンへ赴いたとき、西アフリカの留学生のあいだにこうした態度が極めて顕著であることを発見しました。わたしは機会をえて、在仏黒人たちに、全米黒人向上協会の活動、およびパン・アフリカ運動とむすびついた貴方の活動のことを知らせたのです。かれらは一九三五年の夏に開催が決定されている会議に、貴方

の組織が参加されるよう、お願いすることに決めています。……アフリカ、アメリカ、西インド諸島その他の島々の黒人たちのあいだに、統一の基盤をつくろうというわけですが、そうした試みを御支援くださいませんか。もし貴方のような方々が手をお貸しくだされば、それはできると思うのです……」[11]

実際ここでいう「一九三五年夏に開催が決定されている会議」が予定通り開かれたかどうかは明らかでないが、デュボイは、この書簡にある程度の反応を示し、ただちに多くの黒人指導者に対してみずから書簡を送つて、有色人種の世界的解放を目指すこの若い戦闘的な運動の組織化を、支援するよう要請したといわれる。[12]

こうした経過をたどつて、アフリカ（系）人国際主義へ転向したのち、パドモアは、一九三五年にパリからロンドンへ移つてそこに定住し、C・L・R・ジェイムスや西アフリカ学生同盟との接触を強めつつ、前述のように、同年末のアビシニア国際アフリカ人友好協会の設立に参画するのである。

(1) チレムブウェのエチオピアニズムについては、G. Shepperson & T. Price, *Independent African: John Chilembwe and the Origins, Setting and Significance of the Nyasaland Native Rising of 1915*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 1958 が極めて詳細に論じている。

(2) たとえばイギリスはすでに一九三四年にイタリアとの覚書でイタリアの対エチオピア経済進出を認め、またフランスも一九三五年一月の仏・伊協定によつてエチオピアにおける行動の自由をイタリアに対して認めていたが、イ・エ戦争勃発後国際連盟がおこなつた対イタリア経済封鎖も、英仏両国の宥和的態度によつて、事実上その効果がいちじるしく妨げられた。

(3) Coleman, *Nigeria*, pp. 209-210.

(4) Padmore, *Pan-Africanism or Communism?*, p. 145.

(5) *Ibid.*, p. 145.

(6) J. R. Hooker, *Black Revolutionary: George Padmore's Path from Communism to Pan-Africanism*, London: Pall Mall, 1967, pp. 31 & 34.

(7) *Controversy*, July 1937 & *New Leader*, January 9, 1946, cited in *ibid.*, p. 32.

(8) フッカーは、「パドモアの変節についてはいろいろな解釈がなされたが、のちに二度にわたつて印刷に付せられたかれ自身の説明がもつとも真相に近いと思う」と述べている。(*Ibid.*, p. 32.)

(9) この点については Padmore, *Africa and World Peace*, (1937), London: Frank Cass, 1972 を参照されたい。
(10) Hooker, *op. cit.*, p. 27.
(11) "Letter, Padmore to Du Bois," February 17, 1934, cited in *ibid.*, pp. 39-40.
(12) *Ibid.*, p. 41.

五、国際アフリカ人サーヴィス・ビューローの設立

——パン・アフリカニズム的主体性の萌芽——

アビシニア国際アフリカ人友好協会は、前述のように、エチオピアをイタリアの侵略から救済するための組織であつたが、あくまでもイギリス（政府・国民）を通してその目的を達成しようという運動方針にみられるごとく、その活動は主体性に乏しいきらいがあつた。そしてこの運動が結局所期の目的を達成しえずに終つたことから、西欧列強を権力極とする当時の世界支配体制の枠内で、訴願のかたちをとつた黒人運動やアフリカ・ナショナリズム運動が、いかに無力であるかという深い反省が生じたのであつた。パドモアの言葉をかりれば、「エチオピアに対する残虐な暴挙と、列強の冷笑的な態度とがむすびついて、黒人たちが帝国主義の利益を損う場合には、白人がみずから尊重すべきだと感じている権利を、黒人はもちえないのだという確信を、アフリカ人やいたるところのアフリカ系人にあたえた」のであり、また、「ヨーロッパ人によるアフリカ人への新たな侵略に対して、西欧列強がまつたくこれを防衛しないということがわかつたとき、黒人たちは自分自身へ目をむける必要があると感じた」のである。(1)

このように、アフリカ人、アフリカ系人の救済のために主体的条件を徐々に整えていかなければならないという認識にたつて、一九三七年三月、ロンドンに創設されたのが、国際アフリカ人サーヴィス・ビューローである。国際アフリカ人サーヴィス・ビューローの創設には、旧アビシニア国際アフリカ人友好協会の一部のメンバーにT・R・マッコネンなどが参画

したが、書記長にはウォレス＝ジョンソンが選出され、マッコネンのほかに、C・ジョーンズ、C・L・R・ジェイムス、ケニヤッタ、パドモアなどが執行委員会を構成した。

この組織の目的は、「アフリカ人、アフリカ系人の進歩的かつ開明的な世論を代表する」こと、「アフリカ人、アジア人、その他の植民地人民のもつ民主的諸権利、市民的自由、自決などの要求を支持する」ことであり、また組織への加入はアフリカ人、アフリカ系人にかぎられ、規約の趣旨に賛同するヨーロッパ人その他は、準会員になることが認められていた。(2) しかしながら、国際アフリカ人サーヴィス・ビューローの活動は、パドモア自身も暗に認めているように、イギリス内部にかぎられており、アフリカに直接影響をあたえるところにまではいかなかつたようである。フッカーにいたつては、同サーヴィス・ビューローは「西インド諸島人の組織であり、パドモアがもつていた西アフリカ学生同盟との個人的な接触、およびケニヤッタのように個人的にこれに参加していたアフリカ人をのぞけば、アフリカ人の支持をほとんどえていなかつた」として、(3) この組織のアフリカ的性格の薄さを強調し、かつそれがもつべき内外のアフリカ人に対する影響力をむしろ低く評価している。しかしながら、執行部に参画しているアフリカ人が少数だからという理由で、ロンドンを中心とするイギリス在住のアフリカ知識人に対する国際アフリカ人サーヴィス・ビューローの影響力を低く評価するのは、やや短絡的にすぎるであろう。また、アフリカ大陸内のナショナリストあるいはナショナリズム運動に対しては、それはたしかに直接的な影響力をもちえなかつたかもしれない。しかしながら、英領西アフリカに対しては西アフリカ学生同盟（それは前述のように西アフリカ各地に支部をおいていた）を通じて、あるいは英領東アフリカに対してはケニヤッタのキクユ中央連盟を通じて、それぞれ間接的な影響が程度の差こそあれ、およんだと考える方がむしろ自然であろう。

国際アフリカ人サーヴィス・ビューローの具体的な活動の内容は、しかしながら、むしろ啓発的な側面に傾斜しており、機関誌『インターナショナル・アフリカン・オピニオン』を通じての宣伝、および講演、討論会の開催などがその主たる内

容を構成していた。こうした活動の効果について、当事者の一人であつたパドモアは、のちにいたつてつぎのように回想している。

「ビューローは、英国にいる一団の若いすぐれた黒人知識人をただちに引きつけた。かれらの多くは、イギリス共産党員ではなかつたが、経済的、政治的問題についてはマルクス主義的見解をもつていた人たちであつた。……政治的意識をもつた黒人たちは、三〇年代の〈人民戦線〉期にアフリカ人を〈後進的で素朴な部族民〉としてしかみていなかつたイギリス共産党の機会主義を、軽蔑していた。植民地主義に対する黒人たちの正当な不満は、ヒトラーのドイツからの脅威に対処するための反ファシズム同盟を当時要求していたソ連の外交政策のために、容易に利用されえたのだ。……共産主義の偽善から、嫌悪の情をいだいて転向した国際アフリカ人サーヴィス・ビューローの左翼メンバー――その多くはいまでは植民地の民族運動や労働運動のなかで目だつた地位を占めているが――は、白人の支配――資本主義的支配であれ、共産主義的支配であれ――からの完全な民族独立を求める黒人の、独自の政治的表現としてのパン・アフリカニズムへ、自分たちを方向づけたのである」(4)

右の叙述は、もちろん当事者心理からくる誇大な評価をある程度含んでいるであろうが、それにしても、国際アフリカ人サーヴィス・ビューローがあたえた在英アフリカ（系）知識人に対する影響の質的側面を、誤りなく伝えているであろう。(5)

(1) Padmore, *Pan-Africanism or Communism?*, pp. 145-6.
(2) *Ibid.*, p. 147.
(3) Hooker, *op. cit.*, p. 49.
(4) Padmore, *Pan-Africanism or Communism?*, pp. 147-8.
(5) この点についてはウォロノフの同様な見解がある（J. Woronoff, *Organizing African Unity*, Metuchen, N. J.: The Scarecrow Press, 1970, pp. 21-2.）

六、第二次世界大戦の勃発と一九四〇年代初期の動向

前述のように国際アフリカ人サーヴィス・ビューローは、アフリカ人・アフリカ系人解放の主体的条件を整えるべく、地味ながらその活動を維持して、やがて一九四〇年代を迎える。この間の世界史的な情勢変化としては、なによりもまず、一九三九年九月にはじまつた第二次世界大戦を挙げなければならない。ただ、第二次世界大戦の世界史的意義が大きくかつ多面的であつたことはいうまでもないが、その影響には明らかに地域的な偏差があつた。本稿の主題との関係でいえば、植民地主義体制は大戦によつて大きく揺ぎはじめてはいたものの、それは主としてアジアの場合であり、アフリカにはその直接的な影響はほとんどおよばなかつたのである。

しかしながら、間接的な影響ということになれば、第二次大戦はアフリカと無縁ではなかつた。すなわち、一九四一年八月に発表された大西洋憲章（英米共同宣言）がその一例であつて、同憲章がその第三項で「一切の国民がそのもとで生活しようとする政体を選択する権利を尊重し、主権および自治を強奪された者に主権および自治が返還されることを希望する」旨明確にうたつたことが、アフリカ・ナショナリストの志気を高めたことは確実である。もつとも同憲章が発表された直後の同年九月、チャーチル英首相は、下院における演説で、自分とローズヴェルト大統領の胸中にあつたのは、ナチス・ドイツの支配下に入つたヨーロッパ諸国だけであつて、同憲章第三項は植民地問題を包摂するものではない、と注釈をつけたが、このことは逆に植民地のナショナリズム感情をさらにいつそう強める結果を招来した。(1) たとえば、ナイジェリアのナショナリズム政党ナイジェリア・カメルーン国民会議（National Council of Nigeria and Cameroons）の指導者アジキウェが、一九四三年八月に「大西洋憲章と英領西アフリカ」と題する覚え書を提出し、イギリスの反民主主義的な植民地制度を廃止し、一五年以内に完全独立をあたえるようイギリス植民地省に要求したのは、その具体的な表われである。また西アフリカ

学生同盟も、一九四二年四月にイギリス植民地省次官に対し、「自由、正義、真の民主主義のために、……英領西アフリカ植民地・保護領に対し、戦争終結後五年以内に内部自治をあたえるよう、イギリス政府に強く要請する」という内容の覚え書を手交している。(2)

他方、一九四〇年代にはいると、合衆国のアフリカ人留学生のあいだにも、政治意識の昂揚が目だちはじめた。ゴールド・コーストの留学生エンクルマが拡大改組したアメリカ・カナダ・アフリカ人学生協会（African Students Association of America and Canada）はそうしたアフリカ人留学生の政治意識の昂揚を物語る一つの事例である。

エンクルマの自伝によれば、「この協会は当初アフリカ人の少数の学生が不定期に会合する小さな団体で、組織が小さいために、効果のある活動をすすめることができなかつた」が、エンクルマがこれを拡大改組し、「学生だけでなく、他の仕事に従つているアフリカ人もこの組織に加入できるよう」努力し、「アフリカ人の全部を団結させることができた」のであった。エンクルマがこうした活動を開始したのは、ふたたび自伝によれば、ペンシルヴァニア大学在学中のことであるから、一九四〇年から一九四三年にかけての時期においてであつたであろう。かれはこの時期にアコ・アジェイ（のちエンクルマ政権の内相をつとめることになつた）や、K・A・B・ジョーンズ＝カーティー（のちガーナのアチモタ大学校外研究員となつた）と協力して、協会機関紙『アフリカン・インタプリター』を発行し、これを通じて「ナショナリズムの精神を復活させることに努めた」といわれている。(3)

こうして政治活動に入つた当初から、エンクルマははやくもパン・アフリカニズム的意識に目覚めていたようである。バンコール・ティモシーによれば、「この当時エンクルマは西アフリカ連邦を夢みており、ナイジェリアのエンナムディ・アジキウェ、シェラ・レオンのドゥロシミ・ジョンソンとともに、アフリカへ帰つてゴールド・コースト、ナイジェリア、シェラ・レオンで強力な政治的煽動を開始する計画をたてた」(4)（傍点―小田）のである。しかし、このティモシーの叙述から、

エンクルマとアジキウェのあいだにその政治的立場についてのまつたき意見の一致があつた、という結論を引きだすのは誤りである。エンクルマの自伝によれば、かれを中心とするゴールド・コーストの留学生グループと、ナイジェリアの留学生グループとのあいだには、アフリカ解放運動の戦術をめぐる意見の対立があつた。エンクルマはこうした意見の対立を、つぎのように説明している。

「ナイジェリア人は、植民地・属領の現段階では、アフリカの、あるいは西アフリカの統一などというのは、まだ考慮すべき問題ではないとして、各植民地がそれぞれ自分で闘うこと、つまり他の領土との結びつきとか協同などなしに、各植民地が自己の解放に全力をつくすべきだと主張した。

これに対してわたしとゴールド・コーストの出身者は、領土内の団結――つまり各植民地がみずからの解放を考慮し計画する――という問題は、それが西アフリカの他の運動とむすばれないかぎり、アフリカ人および世界の各地に住むアフリカ出身者の自由と平等は望めないと信じていたのだ」(5)

右の叙述にあるような戦術上の問題をめぐる意見の対立は、厳密にいえば、パン・アフリカニズムによるアフリカの解放か、それとも個別的な小ナショナリズムによるアフリカの解放かという、基本的な争点につながる対立であつたが、それが両派の決定的な分裂をもたらすところにまでいかなかつたのは、この段階では議論そのものがまだ未熟であつて、その対立の本質が強く意識されなかつたからであろう。

しかしながら、そうした問題をのこしつつも、アフリカ知識人の側におけるパン・アフリカニズムへの目覚めは、いまやイギリスにおいてばかりでなく、北米・カナダにまで拡大した。かくて、パン・アフリカニズムが再度復活するための条件は、着々と整えられていつたのである。

(1) Coleman, *Nigeria*, pp. 231-2.; Thompson, *op. cit.*, p. 52.
(2) Thompson, *ibid.*, pp. 52-3.
(3) ヌンクルマ『わが祖国への自伝』(野間訳)・一九六一年・理論社・五二ページ。
(4) B. Timothy, *Kwame Nkrumah: His Rise to Power*, London: George Allen & Unwin, 1955, pp. 32-3.
(5) ヌンクルマ・前掲・五二ページ(一部訳語を修正)。

七、パン・アフリカ連盟の創設——マンチェスター会議への道——

合衆国におけるアフリカ人留学生の政治意識が昂揚を示し、そのなかでパン・アフリカニズムへの目覚めがみられはじめたのと並行して、イギリスにおけるアフリカ人・アフリカ系人のパン・アフリカニズム的組織化への動きは、いっそうその速度をはやめつつあつた。そしてその動きは、ついに第二次大戦末期の一九四四年末、パン・アフリカ連盟(マンチェスター)の創設というかたちで結実したのである。パン・アフリカ連盟は、いわば国際アフリカ人友好協会の後身ともいうべきものであつたが、その創設にあたつては、同協会のメンバーのほかに、イギリス、アイルランドの黒人組織、英領西および東アフリカの一部のナショナリズム組織が代表を送つていた。その主要な組織の名称はつぎの通りである。

黒人福祉センター(Negro Welfare Centre, Liverpool)、黒人協会(Negro Association, Manchester)、黒人労働者協会(Coloured Workers' Association, London)、黒人人民協会(Coloured People's Association, Edinburgh)、黒人植民地人民協会統一委員会(United Committee of Coloured and Colonial Peoples Association, Cardiff)、アフリカ人同盟(African Union, Glasgow)、アフリカ系人学生協会(Association of Students of African Descent, Gt. Britain, & Ireland)、キクユ中央連盟(Kikuyu Central Association, Kenya)、アフリカ人進歩協会(African Progressive Association, London)、アフリカ人青年連盟シェラレオン支部(Sierra Leone Section, African Youth League)、アフリカ人自由友好協会(Friends of African Freedom Society, Gold Coast)[1]

ここには、前期パン・アフリカニズム運動の中心的勢力をなしていた合衆国の黒人団体の名前はみあたらない。パン・アフリカ連盟創設の時点では、それは圧倒的にイギリス在住アフリカ人・アフリカ系人の組織だつたのである。その意味では、パン・アフリカ連盟はその名称の普遍性にもかかわらず、比較的大きな地域的制約をもつていたわけであるが、翌一九四五年のなかばには、合衆国から、後期パン・アフリカニズムの中心的指導者エンクルマを迎えて、そうした地域的制約を部分的に打破するのである。

さて、こうして創設されたパン・アフリカ連盟は、つぎのような目標を掲げて、一九二七年以来途絶えていたパン・アフリカ会議を復活すべく活動を開始した。

㈠　全アフリカのアフリカ人・アフリカ系人の、福祉と統一を促進すること。

㈡　アフリカ人民およびその他の従属人種の自治と独立を、かれらに対する主権と信託統治権を主張している列強の支配からかちとること。

㈢　市民権を等しくアフリカ人民にも取得せしめること、ならびにあらゆるかたちの人種差別を全面的に廃絶すること。

㈣　アフリカ人民と、われわれの希求を共有する他の人民との協働を求めて努力すること。(2)

右の諸目標を一見して気づくことは、「アフリカ人・アフリカ系人の統一」と「アフリカ人民の自治と独立」が明確に、しかも高い優先順位をもつて主張されている点で、かつてデュボイの指導したパン・アフリカニズム運動と異つているということである。一九一九～一九二七年のパン・アフリカ会議においては自治の要求はうちだされたが、それはあくまでも「漸進的、段階的」自治であつたにすぎず、また「独立」の要求はまつたくもりこまれなかつた。しかしパン・アフリカ連盟の場合には、それと明示はしないまでも「即時」自治のニューアンスが強く、また「独立」の要求もはつきりと示されていた。さらにまた、「アフリカ人・アフリカ系人の団結」といつたかつての目標を一歩進めて、「アフリカ人・アフリカ系人

の統一」という現代的な主張をうちだしているのであつて、その点が一九一九～一九二七年のパン・アフリカニズム運動と異つているのである。

目標の第四項で、アフリカ以外の地域の植民地ナショナリズムとの協働をにおわせているのも、注目に値するであろう。以上のような目標を設定したパン・アフリカ連盟は、さらに、植民地において運動をどう組織化するかといつた問題、民族解放闘争の戦略と戦術、ガンディー主義的な非暴力、非協力のテクニックがアフリカ的状況に対して適用可能かどうか、といつた問題、などについて、連盟機関誌『インターナショナル・アフリカン・オピニオン』を通じて討議を深めていつた。こうした連盟の活動は、一九四五年に入るといつそう活発化していつたが、同年五月には、合衆国で独自にアフリカ人留学生グループの組織活動を拡大発展させていたエンクルマがこれに参加し、ここにイギリス、北米のパン・アフリカニズム運動の団結が実現されるにいたつた。そして、いよいよ同年秋に「第五回」パン・アフリカ会議をマンチェスターで開催するその準備が、エンクルマとパドモアを中心として、パン・アフリカ連盟の手で、具体的にはじめられたのである。

(1) Padmore, *Pan-Africanism or Communism?*, p. 147n.
(2) *Ibid.*, p. 149.